

行為者と観察者の帰属の相違と Self-Monitoring¹⁾

岩 淵 千 明
田 中 国 夫

我々の社会生活において、他者について知り理解することは重要な事柄である。我々は、他者の性格・情動・関心・価値・態度などについての情報から、その人がどのような行動をとるのかについて推論しようとする。また逆に、ある行動から他者についての情報を探ろうとし、さらに、なぜそのような行動をとったのかを推測し、どう対処すべきであるのかについて考えることが多い。

社会心理学において、このような他者の行動の理解に関する研究は、対人認知(person perception)という領域で扱われている。そしてここでは、ある行動についての原因を調べることによってその行動を理解しようとする、すなわち、因果関係の認知から行動を解釈しようとする過程を帰属(attribution)の過程と呼んでいる。したがって、帰属過程の研究においては、人々が遭遇する事象や行動について彼らがどのようにして説明・解釈するのかという因果的推論をおこなう場合の情報処理過程を扱うことになる。

この帰属研究においては、ある個人が他の個人(他者)の行動について理解する場合(inter-personal attribution)と、ある個人が自分自身(自己)の行動についての洞察を明らかにしようとする場合(self-attribution)とがある。これらの研究の中で、ある同一行動についての原因帰属において、自己すなわち行為者(actor)としての原因の説明と他者に対してのすなわち観察者(observer)としての原因の説明とは相違が認められると報告している研究がいくつか認められる。

この行動の原因帰属(causal attribution)の相違については、2つの異なった情報処理の過程からとらえられている。すなわち、行動の原因として、一方は、その人の内的状態・性格・能力・先有傾向・態度などの属性的(dispositional)なものによるとし行為者の内部に帰属する傾向を示す内的帰属(internal attribution)をおこなうとする。これに対して、他方は、周囲の状況や外部からの圧力などの状況的(situational)なものによるとし行為者の外部に帰属する傾向を示す外的帰属(external attribution)をおこなうとしている。この帰属の過程についての2分法には多少疑問の余地も残されるが、認知者の行動の原因帰属における先有傾向的な要因と状況的な要因との相対的な重みづけの相違を示しているとも考えられ、ひとつの有効な視点であるとされている。

このような同一行動に対する原因帰属の行為者と観察者との相違については、帰属理論において、Actor-observer bias(以下、AOBと略す)として取り扱われてきた。Kelley(1967)は、行為者と観察者とは知覚の点で差異が認められる、と報告している。また、AOBについて提唱したJones & Nisbett(1971)は、“行為者は自分の行為を状況的なものに帰属する傾向があり、観察者は同一の行為を安定した個人の先有傾向に帰属する傾向がある(P.80)”としている。

ここで、このAOBが生じる原因については、以下のように説明されている。Jones & Nisbett(1971)は、2つの原因を示している。第1は、行為者と観

(1) 本研究において、吉村泰子(関西学院大学社会学部昭和54年度卒)の協力を得た。

察者とにおける情報の質的および量的なレベルの相違である。つまり、行為者は自分の過去について詳しい情報をもっているため、行為の結果を自分の特性に帰属するのを避けたがる。これに対して、観察者は行為者の特性と行動との関連についての弁別性と一貫性に関する情報が不足しているため、行為者自身の特性に帰属させやすい。すなわち、行為者と観察者との間には、同一の対象に対して異なった知覚が成立しており両者それぞれ異なった情報を入手することになる。したがってこれらのことから、同一行為に対して異なった原因推論をすることになる、としている。第2は、行為者と観察者とがもつパーソナリティ概念の相違である。つまり、行為者は自己のパーソナリティを個々の特性のひとつとしてまた目標達成の手段としてとらえる傾向があり、表面的な行動よりその行動が意図する目標を強調する。これに対して、観察者は他者のパーソナリティを、先有傾向や性格特性の集合体としてとらえる傾向にあり、他者の行動はその人の属性を反映したものであるとしやすい。したがってこのパーソナリティ概念の相違が異なった原因推論をおこなうことが考えられる、としている。

また、Monson & Snyder(1977)は、帰属の正確さを指摘している。行為者は、自己の行動をひきおこすさまざまな要因についての広い知識をもっているため、その行動の原因を確認することにおいては観察者よりも正確に帰属できる。すなわち、行為者は、異なる時と状況における自己の行動についての知識から、行動は変化しやすいという判断をもっている。さらに、自己の内的状態についての知識によって、内的状態と社会的状況のどちらが行動の原因として重要であるかを比較し、もっともらしくない原因を棄却することができる。したがって、このような情報分析にもとづくために、行為者の原因帰属は観察者の原因帰属よりも正確である、としている。

このようなA O Bについて、種々の観点から最近多くの研究がおこなわれている。Nisbett, Caputo, Legant, & Marecek(1973)の研究に基づいて、原因

確認の方法(Harvey, Harris, & Barnes, 1975; West, Gunn, & Chernicky, 1975), 行為者のもつ特性についての推論, 行動予測, および観察者との自己帰属の比較(Miller, 1975)など数多くのものがある。これらの研究結果は、Jones & Nisbett(1971)のA O B仮説を支持するものである。しかし、これらの研究とは反対の結果を報告している研究も認められる。例えば、行為者は自分の行動を観察者よりもより自分自身に帰属しやすい(Langer & Roth, 1975; Miller & Norman, 1975), また、行為者は自分は他の人々より状況的な要因に影響されにくいと主張している(Miller, Gillen, Schenker, & Rodlove, 1974)と報告している研究もある。このような諸研究の中で、行為者が観察者よりも属性的な帰属をする条件や観察者が行為者よりも属性的な帰属をする条件を明らかにしようとする研究(Cialdini, Braver, & Lewis, 1974)や行動の社会的望ましさの相違と他者との親密度の相違に注目してA O Bについて明らかにしようとした研究(Taylor & Koivumaki, 1976)も認められる。しかしながら、これらの研究例で示されるようにA O Bについては一貫した結果が得られているとは言い難い。この点に関して、Monson & Snyder(1977)は、A O Bがいつ・どこで・なぜおこなうかということについての理論的詳述が必要であると提言している。

ところで、このA O Bについて行動の原因帰属の相違における個人差に注目した研究がある。すなわち、外的あるいは状況的な要因にもとづいて行動を決定する傾向の強い個人と内的あるいは属性的な要因にもとづいて行動を決定する傾向の強い個人とがあり、したがって、このような行動傾向から、行動の原因帰属においても、状況的な要因に帰属させやすい個人と属性的な要因に帰属させやすい個人とがある、とする研究である。

ここで、この状況的な要因に対する反応の個人差を説明する社会心理学的過程として、Snyder(1974)は、セルフ・モニタリング(Self-Monitoring,

以下、SMと略す)という概念を提唱し、その尺度を構成した。SMとは、状況や他者の行動にもとづいて、自己の表出行動(expressive behavior)や自己呈示(self-presentation)が社会的に適切なのかを観察し(self-observation)、自己の行動を統制すること(self-control)である、と定義される。さらに、個々の社会的行動は、外的な状況や対人場面における他者の反応などの外的要因、あるいは、自己の内的状態・先有傾向・態度などの内的要因のどちらかの情報にもとづいて決定されるとしている。そして、この行動の決定因に関する個々人の重みづけの相違によってSMにおける個人差が明らかにされるとしている。すなわち、外的要因にもとづいて行動する傾向の強い個人は、自己の社会的行動の状況的適切さについての関心が高いため、自己の行動を状況に応じて統制する傾向が強い(high SM)、とされる。これに対して、内的要因にもとづいて行動する傾向の強い個人は、自己の社会的行動の状況的適切さについての関心がそれ程高くないため、自己の行動を状況に応じて統制する傾向は弱い(low SM)、とされる。

このようなSMにおける個人差はSM尺度によって測定される。これは25項目から成る真偽法タイプの尺度で、以下の5内容から構成される、とされている。(a)自己呈示の社会的適切さについての関心(e.g. パーティーや集まりで、他の人が気に入るようなことを、言ったりしようとはしない)、(b)状況的に適切な自己表現の手掛りとしての社会的比較情報への注意(e.g. いろいろな場面でもう振まっていかわからないとき、他の人の行動をみてヒントにする)、(c)自己呈示や表出行動を統制し修正する能力(e.g. よかれと思えば、相手の目をみて、真面目な顔をしながら、うそをつくことができる)、(d)特定の状況におけるこの能力の利用(e.g. 本当はきれいな相手でも表面的にはうまく付き合っていける)、(e)表出的行動や自己呈示が種々の社会的状況で一貫しているか変化しているかの程度(e.g. 状況や相手が

異なれば、自分も違うように振まうことがよくある)。ここで、high SMの個人は、自己の行動と自己の認知や信念が必ずしも対応するものではないと理解しているため、このSM尺度においては、「あまり詳しく知らないトピックスでも、即興のスピーチができる」「本当はきれいな相手でも表面的にはうまく付き合っていける」などの項目を支持し、これに対して、low SMの個人は、自己の行動は自分自身の内的状態・先有傾向・態度などにもとづいていと理解しているため、「自分の気持ちや考え・信じていることを、行動にそのままあらわす」「確信をもっていることしか主張できない。」などの項目を支持する、とされている。

このようなSMという概念からAOBについて考慮すれば、high SMの個人はlow SMの個人に比べて自分自身の行動について属性的に帰属するというよりはむしろ状況的な帰属をおこなうであろうと予測される。すなわち、high SMの個人は、Jones & Nisbett(1971)の仮説とより一致した自己帰属をおこなうということが予想できると考えられる。

この点に関して、Snyder & Monson(1975)は、SMがAOBの調整変数(moderator variable)であるということを暗黙裡に仮定しているのではないかと推測される。すなわち、彼らの実験において、被験者は種々の状況において自己および親友の行動が変化しやすいか否かについて評定するように求められた。その結果、high SMの個人は親友の行動よりも自分自身の行動の方がより変化しやすいと評価し、これに対して、low SMの個人は自分自身の行動より親友の行動の方が変化しやすいと評価していた。このことから、行動が状況によって変化しやすいと評価することが行動をより状況的な要因に帰属するということと等しいと考えることができるならば、SMはAOBを調整する概念であるということが可能であると考えられる。この考え方に従うならば、high SMの個人の自己帰属および他者帰属はAOB仮説と一致するようになると考えられる。しかしながら、Snyder(1976)自身は、状況によって

行動が変化しやすいか否かについての、社会的感受性の概念およびその尺度が、属性的一状況的という帰属の操作的指標として適切であるとは断定していない。

しかし、Berscheid, Graziano, Monson, & Dermer (1976) は、他者の行動に対する原因帰属に SM が関係している、と報告している。すなわち、high SM の個人は他者の行動についてより属性的に帰属しやすいとしている。この結果については、Snyder (1976) による“high SM の個人にとって、他者との相互作用の状況において、他者の行動がその個人の性質によるものであると知覚することは、その他者の行動に基づいて表出的な自己呈示をおこなう際のモニタリングの手がかりとして有効であろう”という説明があてはまるのではないかと考えられる。

このような観点に基づいて、Brockner & Eckenrode (1979) は、SM という概念を用いて AOB を明らかにしようとした。すなわち彼らは、“大学入学の決定”という行動に対する原因帰属と Nisbett *et al.* (1973) で用いられた特性記述課題 (Trait Ascription Task) から、high SM の個人は low SM の個人に比べて、自分自身の行動をより状況的に帰属し、また、他者の行動をより属性的に帰属していることを示した。そして、high SM の個人はより大きな AOB を示す、と報告している。

これらのことから、本研究においては、Brockner & Eckenrode (1979) の研究にもとづいて、SM と AOB との関係を明らかにすること、さらに、Taylor & Koivumaki (1976) の研究にしたがって、この関係が親密度の異なる他者および社会的望ましさの異なる行動においても認められるのかについて検討することを目的とする。

仮説 1 AOB は、low SM の個人よりも high SM の個人の方が大きいであろう。すなわち、high SM の個人は自分自身の行動をより状況的に帰属し、他者の行動はより属性的に帰属する傾向が大きいであろう。

仮説 2 他者との親密度の相違においては、AOB は親密度が高い程大きく、この傾向は high SM の個人の方が大きいであろう。

仮説 3 社会的望ましさの異なる行動においては、AOB は社会的に望ましくない行動の方が大きく、この傾向は他者との親密度が高い程大きいであろう、さらに、この傾向は high SM の個人の方が大きいであろう。

方 法

質問紙 質問紙は、以下の課題および尺度から構成されている。

(1) 特性記述課題 (Trait Ascription Task. 以下、TAT と略す)。Nisbett *et al.* (1973) によって用いられたものである。すなわち、性格特性を示す 1 対の形容詞に、“場合による”という反応カテゴリーが加えられた三者択一の反応形式による課題である (e.g. ひかえめな—自己主張する—場合による)。Nisbett *et al.* (1973) の研究ではこのような課題が 20 個示されていた。しかし、本研究ではこの 20 の形容詞対について検討した山本 (1977) にもとづいて、各形容詞対において社会的望ましさの次元で有意差が認められないもの 10 対を選出した。その理由は、各形容詞対のそれぞれにおいて、形容詞それ自体の社会的な望ましさがいれば、被験者の反応がより社会的に望ましい形容詞の方を選択することが予想されるので、この影響を除去するために社会的望ましさの次元で差の認められない形容詞対を選出することにした。このようにして選出された形容詞対は、分析的な—直観的な、理想主義的な—現実主義的な、活動的な—落ちつきのある、おおやかな—きっぱりした、実際のな—論理的な、情熱的な—冷静な、用心深い—信じやすい、あかぬけした—素朴な、デリケートな—ドライな、他を気にせずにする—自分を抑える、などの 10 対であり、それぞれの形容詞対に“場合による”という反応カテゴリーを加え、被験者に提示した。そして、本研究では、自分自身に対する評価だけではなく、親密度の異なる他者、

すなわち、友人（同性・同年代で非常に親しく思っている人）および顔見知り（同性・同年代で顔だけは知っているという人）についても同様の評価を求めた。

このTATにおいては、形容詞対のうちどちらかの形容詞を選択する数が多い程より属性的な帰属をする傾向があることを示す。したがって、“場合による”という反応カテゴリーを選択する数が多い程より状況的な帰属をする傾向があることになる。得点化については、各対のうち“場合による”を選んだ場合に1点を与え、自分自身・友人・顔見知りのそれぞれについての総和を求め、これをそれぞれの被験者ごとのTAT得点とした。

(2) 行動帰属尺度(Behavioral Attribution Scale, 以下, BASと略す)。この尺度では、社会的に望ましいとされる行動(Positive behavior)・望ましくないとされる行動(Negative behavior)・社会的な望ましさの次元ではどちらもいえない行動(Neutral behavior)という3行動への反応を求めた。この対象行動の設定に際しては、10行動について47名に、各行動の社会的望ましさの次元から9点尺度で評価させた。そして、“バスや電車の中で老人に席を譲る”を社会的に望ましい行動として、“授業をさぼる”を社会的に望ましくない行動として設定した。また、社会的望ましさの次元からはどちらもいえない行動としては、Brockner & Eekenrode (1979)と同様に“大学への入学決定”という行動を設定した。次に、どのような理由からこれらの行動をとるのかについて、60名に自由記述形式で回答させた。これにもとづいて、各行動ごとに5理由を選択した。それぞれの理由は、一方は属性的、他方は状況的な文章で示される対表現形式で示されている。例えば、バスや電車の中で老人に席を譲るという行動については、“私は老人を大切にしたいと思うから”に対して“老人を大切にしなければならぬという世間一般の風潮があるから”，というような5対の理由。授業をさぼるという行動については、“私はその授業内容に興味がもてないから”に対し

て“授業内容がおもしろくないから”，というような5対の理由。大学への入学決定という行動については，“私自身がこの大学に来たいと思ったから”に対し“親・先生・先輩や友人に勧められて”，といった5対の理由，である。そして、これら各行動のそれぞれの対理由に対して、自分自身・友人・顔見知りに対する評価を求めた。反応形式は、各行動における5対の理由それぞれに対して、

属性的な理由		状況的な理由
そう思う	3 2 1 0 1 2 3	そう思う

という形式である。

得点化については、状況的な理由に対してそう思うと反応する場合にはプラスの得点，属性的な理由に対してそう思うと反応する場合にはマイナスの得点を与える7段階評定とした。そして、自分自身・友人・顔見知りのそれぞれについて、各行動ごとにその総和を求め、これをそれぞれの刺激人物および対象行動に対する各被験者ごとのBAS得点とした。

(3) セルフ・モニタリング尺度(Self-Monitoring scale, 以下, SM尺度と略す)。この尺度は、Snyder (1974)によって構成されたもので、真偽法による25項目からなる。なお、SM尺度については、Snyder (1974)の研究では、.70の内的信頼性と.83の再検査法による信頼性が得られている。また、邦訳における内的信頼性は.72であった。このSM尺度は、高得点(high SM)ほど、状況的な要因に対して敏感であることを示す。

質問紙は、TAT, BAS, SM尺度の順で呈示される。しかし、TATの刺激人物、BASの刺激人物と対象行動の組み合わせについては、順序効果がおこらないようランダムに配列した。質問紙は、小冊子にして被験者に配布した。

被験者 被験者は関西学院大学の学生188名である。しかし20名は回答に記入もれがあったため分析対象からは除外した。最終的には男86名・女82名の計168名を被験者として用いた。

結 果²⁾

Actor - observer Index

Brockner & Eckenrode (1979)の研究にもとづき、本研究でもAOBの大きさを示す指標として、Actor-observer Index (以下、AOIと略す)を用いた。AOI得点の算出は以下の手続による。まず、TATにおいて、自己のTAT得点から他者それぞれ(友人あるいは顔見知り)のTAT得点を引いたものを求めた。また、BASにおいても、各行動ごとに、自己のBAS得点から他者のBAS得点を引いたものを求めた。そして、この両方の得点をそれぞれZ変換した後、両得点の和を求めた。³⁾これを、AOI得点とした。ここで、AOI得点においては高得点ほどAOBが大きいということを示す。すなわち、他者への帰属よりも自己に対する帰属の方がより状況的な要因による傾向が強いということを示すものである。

TABLE 1は、high SM群と low SM群における各行動での各他者に対するAOI得点の平均値を示したものである。なお、高得点ほど状況的に帰属していることを示している。さらに、SM尺度の得点から、メディアン(Me = 13.27)によって、被験者を high SM群と low SM群とに分割した。

TABLE 1: Mean Score of Actor-observer Index

			Actor-observer Index	
			vers. Friend	vers. Acquaintance
Self-Monitoring	High N=81	Positive	1.91	3.96
		Neutral	2.86	3.83
		Negative	1.85	3.51
	Low N=87	Positive	-1.78	-3.69
		Neutral	-2.67	-3.57
		Negative	-1.72	-3.27

ここでAOI得点においては、友人($\bar{x} = .075$)と顔見知り($\bar{x} = .256$)とでは有意な差が認められず($t < 1$)、また、それぞれの行動(Positive $\bar{x} = .134$; Neutral $\bar{x} = .150$; Negative $\bar{x} = .122$)でも有意な差は認められなかった($t < 1$)。

しかし、SMを考慮すると、全体的に high SM($\bar{x} = 2.985$)と low SM($\bar{x} = -2.782$)とではAOI得点に有意な差が認められた($t_{(166)} = 2.43, p < .05$)。次に、各他者に注目すると、友人(high SM $\bar{x} = 2.206$; low SM $\bar{x} = -2.056, t_{(166)} = 2.28, p < .05$)、顔見知り(high SM $\bar{x} = 3.746$; low SM $\bar{x} = -3.508, t_{(166)} = 3.04, p < .005$)、それぞれにおいて有意差が認められた。さらに各行動に注目すると、positiveな行動(high SM $\bar{x} = 2.932$; low SM $\bar{x} = -2.732, t_{(166)} = 2.40, p < .05$)、Neutralな行動(high SM $\bar{x} = 3.345$; low SM $\bar{x} = -3.120, t_{(166)} = 2.50, p < .01$)、Negativeな行動(high SM $\bar{x} = 2.678$; low SM $\bar{x} = -2.450, t_{(166)} = 2.32, p < .05$)、それぞれにおいて有意差が認められた。

さらに、TABLE 1より、各他者における各行動ごとのSMの効果について検討することにする。まず、友人の場合において、Positiveな行動($t_{(166)} = 1.74, p < .05$)、Neutralな行動($t_{(166)} = 2.39, p < .01$)、Negativeな行動($t_{(166)} = 1.65, p < .05$)、それぞれ有意差が認められた。また、顔見知りの場合においても、Positiveな行動($t_{(166)} = 3.10, p < .001$)、Neutralな行動($t_{(166)} = 2.57, p < .01$)、Negativeな行動($t_{(166)} = 2.54, p < .01$)、それぞれ有意差が認められた。⁴⁾

したがって、SMという概念がAOBの大きさに関係しているということが示された。すなわち、他者との親密度の各次元および行動の社会的望ましさの各次元において、high SMの個人の方が low SM

(2) 結果の分析において、男女差は認められなかったため、以下の分析は男女を含めたものである。
(3) TAT得点とBAS得点は、それぞれ性質の異なった尺度から得られたデータであるためZ変換をおこなった。
(4) ここでのt検定は、high SMの方がより大きなAOBを示すことが予想されたため、片側検定を用いた。

の個人よりもより A O B が大きいといえる。これは仮説 1 を支持するものである。したがって、low SM の個人の方が自己および自己の行動をより状況的に帰属し、また、他者および他者の行動についてはより属性的に帰属する傾向があると考えられる。

Trait Ascription Task

Nisett *et al.* (1973) および Berscheid *et al.* (1976) の研究に基づいて、仮説 2 については T A T 得点から検討する。なお、ここでの分析は T A T の素点を用いた。

まず、自己および他者（友人あるいは顔見知り）のそれぞれに対して、“場合による”というカテゴリーを選択した数は、自己（ $\bar{x}=2.80$ ）、友人（ $\bar{x}=2.02$ ）、顔見知り（ $\bar{x}=1.87$ ）であり、全体的な差が認められた（ $F_{(2,501)}=8.529, p<.01$ ）。ここで、自己と他者（友人あるいは顔見知り）との間にはそれぞれ有意差が認められた（ $p<.05$ ）。しかし、友人と顔見知りの間では有意差は認められなかった。このことは、他者（親密度の相違とは関係なしに）に対するよりも自分自身に対してより状況的に帰属する傾向があるということを示すと考えられる。

次に、SM を考慮してこの点について検討する。TABLE 2 は、high SM 群と low SM 群において、自己・友人・顔見知りのそれぞれについて“場合による”という反応カテゴリーを選択した平均回数を示したものである、したがって、高得点ほど状況的に帰属していることを示している。

TABLE 2 より、自己においては、high SM の個人の方が low SM の個人よりもより状況的に帰属

TABLE 2: Mean Frequency of
“depend on the situation” at TAT

		Self	Friend	Acquaintance
Self-Monitoring	High N=81	3.16	1.98	1.57
	Low N=87	2.46	2.07	2.15

している（ $t_{(166)}=2.04, p<.05$ ）。しかし、友人の場合（ $t<1$ ）および顔見知りの場合（ $t_{(166)}=-1.72, n.s.$ ）には有意差は認められなかった。

これらのことから、行動特性の帰属の相違を示す指標である T A T 得点においては、他者よりも自己に対してより状況的に帰属しやすく、この傾向は high SM の個人の方がより強いということが認められた。したがって、他者に対する行動特性の帰属では、high SM の個人は状況的に帰属するというよりはむしろ属性的に帰属する傾向があると考えられる。

さらに、自己および他者との親密度の相違の次元において、A O B の大きさを比較するために、T A T 得点から A O I を求め検討した。これによると、友人に対する帰属（high SM $\bar{x}=1.19$; low SM $\bar{x}=0.39, t_{(166)}=2.52, p<.05$ ）と顔見知りに対する帰属（high SM $\bar{x}=1.59$; low SM $\bar{x}=0.31, t_{(166)}=3.20, p<.005$ ）では、それぞれ high SM の個人の方がより状況的に帰属することが認められた。しかし、友人に対する帰属（ $\bar{x}=0.77$ ）と顔見知りに対する帰属（ $\bar{x}=0.95$ ）との比較では A O B の大きさに差異は認められなかった（ $t<1$ ）。また、この傾向については SM を考慮しても同様であった（ $t<1$ ）。

ここで、TABLE 1 に注目しても、high SM の個人の友人に対する帰属（ $\bar{x}=2.21$ ）と顔見知りに対する帰属（ $\bar{x}=3.77$ ）とでは有意な差は認められなかった（ $t<1$ ）。

したがって、顔見知りに対するよりも友人に対する方がより A O B が大きい、つまり、友人に対してより状況的に帰属しやすい。さらにこの傾向は high SM の個人の方が大きいとする仮説 2 は支持されないと考えられる。すなわち、他者との親密度の相違に対する帰属では、A O B の大小には差異が認められなかった。

しかしながら、この T A T においては、他者よりも自己に対してより状況的に帰属しやすく、この傾向は high SM の個人ほど強い、ということは認められた。

Behavioral Attribution Scale

仮説3については、BASから検討する。なお、ここでの分析はBAS得点の素点を用いている。

まず、Taylar & Koivumaki (1976)の研究にもとづいて、Positiveな行動とNegativeな行動の帰属が、自己および他者によって異なるか否かについて検討する。行動(2)×刺激人物(3)の2要因の分散分析をおこなったところ、交互作用が認められる傾向にあった($F_{(2,501)} = 2.95, p < .10$)。したがって、社会的な望ましきの異なる行動の帰属は、自己および他者(友人や顔見知り)によってそれぞれ異なる傾向があるのではないかと考えられる。各行動においては、Negativeな行動($\bar{x} = -0.72$)よりPositiveな行動($\bar{x} = -2.07$)をより属性的に帰属していた($F_{(2,501)} = 13.47, p < .001$)。さらに名刺激人物においては、友人($\bar{x} = -2.13$)、自己($\bar{x} = -1.77$)、顔見知り($\bar{x} = 0.29$)の順に属性的に帰属していた($F_{(2,1002)} = 9.38, p < .001$)。

さらに、各行動における自己および他者のそれぞれについて検討すると、Positiveな行動では、顔見知り($\bar{x} = -0.35$)よりも自己($\bar{x} = -2.63$)および友人($\bar{x} = -3.22$)に対してより属性的な帰属をしていた($p < .05$)。ここで、自己と友人との間には有意な差は認められなかった。これに対して、Negativeな行動では、自己($\bar{x} = -0.90$)、友人($\bar{x} = -1.30$)、顔見知り($\bar{x} = -0.24$)の間に有意な差は認められなかった。

次に、SMを考慮してこの点について検討する。TABLE 3は、high SM群とlow SM群において、自己および他者(友人および顔見知り)における各行動の帰属を示したものである。⁵⁾ここでも、高得点ほどより状況的な帰属をするということを示している。

TABLE 3において、Positiveな行動およびNegativeな行動それぞれにおいて、自己および他者に対する帰属にSMのhighとlowによる差は認め

TABLE 3: Mean score of Behavioral Attribution Scale

			Behavior		
			Positive	Neutral	Negative
Self-Monitoring	High N=81	Self	-2.35	-1.00	-0.99
		Friend	-2.95	-0.62	-1.12
		Acquaintance	-0.64	0.30	-0.59
	Low N=87	Self	-2.91	-1.62	-0.82
		Friend	-3.47	-0.62	-0.94
		Acquaintance	-0.07	0.46	0.09

られなかった。したがって、社会的望ましきの異なる行動の帰属において、SMは関係しないのではないかと考えられる。

また、この点について、AOBの大小を示しているTABLE 1から検討してもこの傾向は同様であった。

これらのことより、全体的にNegativeな行動よりPositiveな行動をより属性的に帰属しやすいという結果から、社会的に望ましくない行動においてAOBが大きいと考えられる。しかし、この傾向に親密度の相違による差異は認められなかった。また、この傾向についてSMは無関係であった。したがって、仮説3については部分的に支持されるのではないかと考えられる。

すなわち、このBASにおいては、社会的に望ましいとされる行動において、自己および親密度の高い友人の方が親密度の低い顔見知りよりも属性的に帰属しやすいということが認められた。

考 察

本研究においては、Self-Monitoring (SM)とActor-observer bias (AOB)との関係、また、親密度の異なる他者および社会的望ましきの異なる行動において、どのような場合にこの関係が認められるのかについて明らかにしてきた。

(5) ここで、分析ではNeutralな行動についての得点は用いていない。

まず A O B の大小の程度の指標である A O I 得点においては, high SM の個人は low SM の個人よりもより大きな A O B を示していた。この傾向は, 親密度の異なる他者および社会的望ましさの異なる各行動においても同様であった。したがって, A O B には SM が関係しており, high SM の個人ほど A O B が大きいということが考えられる。すなわち, high SM の個人は low SM の個人よりも, 自己の行動をより状況的に, また, 他者の行動をより属性的に帰属しやすい, と考えられる。この結果については, Brockner & Eckenrode (1979) とほぼ同様である。彼らは, SM は A O B の調整的なパーソナリティ変数 (moderating personality variable) であるとしている。

次に, 他者との親密度の相違における A O B については, 自己および他者の行動特性についての帰属を調べた T A T に注目する。ここでは, 自己の行動特性を他者の行動特性よりもより状況的に帰属し, 他者の行動特性をより属性的に帰属していた。この点に関して, Nisbett *et al.* (1973) は, 観察者は行為者の行動を行為者の安定した先有傾向に帰属する傾向がある, と報告している。さらに, この傾向は, high SM の個人ほど大きいということが示されている。この点に関しては, Berscheid *et al.* (1976) が, high SM の個人は, 将来において他者との何らかの交互作用が予期される時, 他者の行動をパーソナルな特性で特にとらえようとしている, と報告している。また, Snyder (1976) は, high SM の個人は属性的に決定されたものとして他者の行動をとらえるように動機づけられやすい, と報告している。さらに, McGee & Snyder (1975) は, 自己の行動を属性的な要因によって決定したと説明する傾向の強い個人 (low SM) は, 状況的な要因によって決定したと説明する傾向の強い個人 (high SM) よりも, 自分自身により多くの性格特性を帰属させている, と報告している。

しかしながら, 友人と顔見知りという親密度の相違については, 親密度の違いにおける帰属の差異は

認められず, また, low SM の個人の方がどちらかといえば状況的に帰属しやすいのではないかと考えられる。ここで, A O I 得点における親密度の相違についての結果も総合して考えれば, 他者との親密度の相違における帰属の相違には, SM の高低に加えて他の要因も関係しているのではないかと推測される。

また, 社会的望ましさの異なる行動における A O B については, 自己および親密度の異なる他者に対する各行動における帰属を調べた B A S に注目する。ここでは, 社会的に望ましくない行動よりも社会的に望ましい行動をより属性的に帰属していた。したがって, 社会的に望ましくない行動の方がより大きな A O B を示すということが考えられる。また, 社会的に望ましい行動においては, 自己および親密度の高い友人に対してより属性的に帰属していた。この Positive な行動における結果は, Taylor & Koyumaki (1976) とほぼ同じような結果であると考えられる。しかし, ここで SM はこれらの結果とは無関係であった。

これらのことから, SM がある行動における行為者と観察者との帰属の相違に関連しているが, この関連は, 他者との親密度の相違においてはある程度認められるが, 社会的望ましさの異なる行動においては認め難いのではないかと考えられる。

ここで, SM という概念からこの A O B についての考察をおこなうことにする。

まず, SM という概念そのものから考えれば, SM 尺度の因子分析による尺度分析についての結果から, この尺度は 3 因子によって構成されると報告されている。

すなわち, Briggs, Cheek, & Buss (1980) は, 外向性 (extraversion), 他者志向性 (Other-directedness), 演技性 (acting) という因子を抽出している。ここで, 外向性因子は, 外的・社会的な事柄への関心が高く社交的であるということを示す因子である。また, 他者志向性因子は, 他者や状況への関心の高さおよび配慮などで, ある状況での行動の適切さへの関心また他者や状況を考え自分の

気持を抑えるということを示す因子である。すなわち、社会的行動の適切さについての関心や社会的行動の手掛りに対する感受性を示すものであると考えられる。さらに、演技性因子は、演技して他者を喜ばせたり、人前で流暢に話せるということを示す因子である。すなわち、種々の状況や他者の反応を考慮したうえで、自己表出や自己呈示をおこなうという印象管理 (impression management) の概念に関係すると考えられる。したがって、SMとAOBとが関係したのは、SMの概念の中でも特に他者志向性因子および演技性因子という側面の影響が強く、さらに、high SMの個人ほどこの傾向が強いためであろうと考えられる。

さらに、SMにおける行為者と観察者の帰属の相違については、以下のような報告がある。Snyder (1979a・b)は、Social Knowledge という点から以下のような説明をしている。行為者の帰属すなわち自己の行動の帰属については、high SMの個人は、状況的および対人的に適切と考えられる社会的行動を敏感にかつ実際におこなうことについて比較的柔軟で適合的であると自分自身でみなしているため、自分自身の行動についてはどちらかといえば状況的な要因で説明しがちである。このことに対して、low SMの個人は、自分自身の行動は態度・感情・先有傾向などと対応しているものとみなしているため自分自身の行動についてはどちらかといえば属性的な要因で説明しやすいとしている。また、彼は、観察者としての帰属すなわち他者の行動についての帰属についての明確な記述はしていないが、Jones & Baumeister (1976)の研究結果にもとづいて、high SMとlow SMの個人のそれぞれの他者に対する帰属の相違について、以下のように説明している。それによると、low SMの個人は他者の行動をそのままうけとりやすい。しかし、high SMの個人は、他者の行動とその行動の動機との間の関係を解釈しようとしている。このことから、他者に対する帰属においても、high SMの個人とlow SMの個人とでは帰属の仕方に差異が認められるのではないかと考えられる。

これらのことにもとづいて、このSMの高低による自己と他者に対する帰属の相違に注目し、社会的相互作用において、SMによる個人差から自己および他者に対する帰属の過程および他者についての知識における差異を明らかにしようとする研究がある。例えば、Snyder & Cantor (1980)は、自己および他者と諸状況についての異なった行動の帰属および知識から、low SMの個人とhigh SMの個人とはそれぞれ異なった知識のタイプすなわちself imageとprototype imageとを形成するとしている。彼らは、SMと特徴的な自己および他者についてのイメージとの関係を調べた結果、種々の行動の多様性についての記述において、low SMの個人はhigh SMの個人よりも自己についての知識が多くまた豊富なself imageをもっている、これに対して、high SMの個人はlow SMの個人よりも他者についての知識が多くまた他者についての種々様々なprototype imageをもっている、と報告している。

このSnyder & Cantor (1980)の研究で示されるように、自己および他者に対する帰属の相違という観点からは、我々の社会的行動や状況および他者との相互作用において、自己や他者について、また、その行動について理解する上での有効な視点を提供するのではないかと考えられる。

以上のことから、本研究においては、帰属理論における主要な課題のひとつであるところのActor-observer biasすなわち行為者と観察者との帰属の相違には、社会的・状況的および対人的な要因に対する反応の仕方の個人差を示すSelf-Monitoringという概念が影響している、ということをはっきり示すことができた。

しかしながら、本研究では、SMと親密度の異なる他者における帰属の相違との関係、さらに、SMと社会的な望ましさの異なる行動における帰属の相違との関係については、仮説を支持するような結果を得ることができなかった。この点に関して、今後さらに検討をおこなう必要があると考えられる。

引用文献

- Berscheid, E., Graziano, W., Monson, T., & Dermer, M. 1976 Outcome dependency: Attention, attribution, and attraction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **34**, 978—989.
- Briggs, S. R., Cheek, J. M., & Buss, A. H. 1980 An analysis of the self-monitoring scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, **38**, 679—686.
- Brocker, J. & Eckenrode, J. 1979 Self-monitoring and the actor-observer bias. *Representative Research in Social Psychology*, **9**, 81—88.
- Cialdini, R. B., Braver, & Lewin, S. K. 1974 Attributional bias and the easily persuaded other. *Journal of Personality and Social Psychology*, **30**, 631—637.
- Harvey, J. H., Harris, B., & Barnes, R. B. 1975 Actor-observer differences in the perceptions of responsibility and freedom. *Journal of Personality and Social Psychology*, **32**, 22—28.
- Jones, E. E., & Baumeister, R. 1976 The self-monitor looks at the ingratiation. *Journal of Personality*, **44**, 654—674.
- Jones, E. E., & Nisbett, R. E. 1971 *The actor and the observer: Divergent perceptions of the causes of behavior*. Morristown, New Jersey : General Learning Press.
- Kelley, H. H. 1967 Attribution in social psychology. In D. Levine(Ed.), *Nebraska Symposium on Motivation*. Lincoln:University of Nebraska Press.
- Langer, E. J., & Roth, J. 1975 Heads I win, tails, it's chance: The illusion of control as a purely chance task. *Journal of Personality and Social Psychology*, **32**, 951—955.
- McGee, M. G., & Snyder, M. 1975 Attribution and behavior: Two field studies. *Journal of Personality and Social Psychology*, **32**, 185—190.
- Miller, A. G. 1975 Actor and observer perceptions of the learning of a task. *Journal of Experimental Social Psychology*, **11**, 95—111.
- Miller, A. G., Gillen, B., Schenker, C., & Rodlove, S. 1974 The prediction and perception of obedience to authority. *Journal of Personality*, **42**, 23—42.
- Miller, A. G., & Norman, S. A. 1975 Actor - observer differences in perceptions of effective control. *Journal of Personality and Social Psychology*, **31**, 379—389.
- Monson, T., & Snyder, M. 1977 Actors, observers, and the attribution process: Toward a recognition. *Journal of Experimental Social Psychology*, **13**, 89—111.
- Nisbett, R. E., Caputo, Legant, P., & Marecek, J. 1973 Behavior as seen by the actor and as seen by the observer. *Journal of Personality and Social Psychology*, **27**, 154—164.
- Snyder, M. 1974 The self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **30**, 526—537.
- Snyder, M. 1976 Attribution and behavior: Social perception and social causation. In J. H. Harvey, W. J. Ickes, & R. F. Kidd(Eds.), *New directions in attribution research, Vol. 1*, Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, 53—72.
- Snyder, M. 1979 a Cognitive, behavioral, and interpersonal of consequences of self-monitoring. In P. Pliner, K. R. Blankstein, I. M. Spigel, T. Alloway, & L. Krames(Eds.), *Advances in the study of communications and affect, Vol. 5: Perception of emotion in self and others*. New York : Plenum Press, 181—201.

Snyder, M. 1979 b Self-monitoring processes. In L. Berkowitz(Ed.), *Advancies in experimen - tal social psychology*, Vol. 12, New York: Aca-
demic Press, 85—128.

Snyder, M., & Cantor, N. 1980 Thinking about
ourselves and others:Self-monitoring and social
knowlege. *Journal of Personality and Social Ps-
ychology*, 39, 222—234.

Snyder, M. & Monson, T. 1975 Persons, situa-
tions, and the control of social behavior.*Journal
of Personality and Social Psychology*, 32, 637—
644.

Taylor, S. E., & Koivumaki, J. H. 1976 The
perception of self and others:Acquaintanceship,
affect, and actor-observer differences. *Journl of
Personality and Social Psychology*, 33, 403—
408.

West, S. G., Gunn, S. P., & Chernicky, P.
1975 Ubiquitous Watergate:An attributional an-
alysis. *Journal of Personality and Social Psyc-
hology*, 32, 55—65.

山本かや 1977 自己と他者への性格特性の帰属
—行為者と観察者の観点から—. 関西学院大学社会
学部学士論文 (未刊).